2009 年 1 月 14 日放送

私の漢方学習法①

麻生飯塚病院　東洋医学センター　所長　　三潴　忠道

漢方医学とは、約 1500 年前に日本に伝えられた中国医学が、その後の歴史の中で発展して来たものです。漢方と呼ばれるようになったのは江戸時代になってからですが、わが国の医学の主流でした。その後、西洋医学を取り入れた明治時代の政策により、漢方は医療現場からほぼ姿を消しました。しかし西洋医学では十分な満足の得られない病気、あるいは病人もいます。一部の先人たちの努力によって受け継がれてきた漢方は、戦後、再び徐々に評価されるようになりました。平成 14 年には医学部のコアカリキュラムの中に『和漢薬を概説できる』と明記されて、医学部での漢方教育が始まりました。その第一期生が医師になった今年４月には、治療方法として漢方の標榜も許可されました。ただ、私の育ったころには、漢方は医学の専門家から、まだほとんど認められていませんでした。

私はもの心ついたときから虚弱で、名のある病気だけでも小児喘息、肺炎は２･３度、小学校１年生の時には急性腎炎などに罹り、また小学校４年生頃までは殆ど毎月かぜをひいて１週間は寝込んでいました。「今でも虚弱ですが」と続けると、必ずといっていいほど笑われるほど丈夫になりましたが、健康には結構気を使っているつもりです。私の産まれは東京の世田谷区経堂町というところで、当時の我が家では、病気というとご近所の中村医院の他に、指圧や漢方薬などで治療する島本先生というおばあさん先生にかかるのが常で

した。当然、私も頻繁に両方のお世話になっていました。そのためか、小学校入学前から、自分は将来、医者になりたいと思っていました。また、ホームドクターの中村正男先生は、鍼灸治療から派生した良導絡学会の副会長などもされたようですが、医者になるなら漢方もわかる医者になりなさい、と勧めてくださいました。私は少なくとも中学生の時には、西洋医学だけではなく漢方のできる医者を目指すようになりました。そう考えると、私は殆ど一筋に子供の頃からの夢に沿って歩いて来た、珍しい人間かもしれません。

実は私の家は３代前の明治時代までは医者だったようで、中国最古の薬物書を書いたとされる神農の描かれた掛け軸などがありました。

ただし曽祖父の三潴謙三は日本の医学部、当時の大学東校の１回生で、我が家には当事のノートや著作も残されています。内科学会雑誌によると、明治５年にはジフテリアの感染および病原について報告したという、日本における近代西洋医の、いわば草分けであったようです。医師を目指した背景には、こんなことも影響していたかもしれません。ちなみに、謙三の同級生のひ孫は現在、私を含めて３人が漢方を志す医師仲間になっていまして、いずれも時代の先端を行きたがる家風なのかと思っています。しかし、漢方医になるにも６年間の大学医学部を卒業する必要があると私が知ったのは、のんきなことに高校２年生頃という間抜けでした。

その後、昭和４７年に千葉大学医学部に入学したところ、東洋医学研究会という学生サークルがあることを知り、早速入会しました。千葉大学の東洋医学研究会は、藤平健先生が中心となって昭和１４年に創設され、その後は藤平先生と共に「千葉の三羽ガラス」といわれた、小倉重成先生、伊藤清夫先生などのご指導を受けていた、伝統あるサークルです。そんなことは全く知らずに千葉大学に入学したのですが、本当に運命の神様には感謝しています。

入学後、東洋医学研究会、略して東医研の月曜日に開かれる部会と、毎週木曜日の夕方に東医研が主催し、先生方に２時間ほど講義をしていただく公開自由講座にはなるべく出席するようにしました。また同級生とお願いし、薬学部の原田正敏先生に、毎週１回、朝１時間ほど傷寒論の勉強会をしていただいたこともあります。ただ、漢方はもちろん医学など全く知らず、初めのうちはどれもチンプンカンプンでした。私は実は高校時代からはじめた陸上競技に夢中でしたし、もともと勉強嫌いです。そこで、６年間これらの勉強会に出席すれば、「門前の小僧、習わぬ経を読む」ように漢方が身につくであろうと、怠けた考えを持っていました。ただ、医学部の専門科目が始まる前から、今考えれば一流の漢方講義のシャワーを浴びていたわけで、漢方医学的な考え方の基本がいつの間にか身に染み付いたように思います。

千葉大医学部では、教養課程の２年間が終わって３年目を医学部１年、学１と呼んでいます。学１は講義や実習が厳しく「地獄の学１」と呼ばれていましたが、その年の秋に、私は東医研のハウプト、つまり部長になってしまいました。本来は学２からが責任学年ですが、その頃の東医研は部員不足だったのです。しかも１年下には、優秀な薬学部の部員、

たとえば現在の昭和大学薬学部・鳥居塚和生教授などがいました。

しかし、部会の勉強会などは私が主催しなくてはならず、勉強をしない私は先輩の助けを借りに走ったり、苦労しました。毎年、夏には合宿して勉強したのですが、その教材としてガリ版刷りの冊子を学習班が作ります。この原型は 3 年先輩で後に富山医科薬科大学の助教授になった土佐寛順先生が、自由講座での藤平先生や小倉先生の講義を基にまとめたもので、毎年改定して使っていました。

現在、私が漢方の研修会で使う教材のルーツはこのプリントで、最近、本としてまとめて出版しました。その研修会の講義録を基にした本は既に数年前に出版しています。またハウプトになると、木曜日の自由講座では前の週に小倉先生が出された症例問題に答えを発表したり、夏休みには木更津の小倉医院に実習に行く慣わしもありました。そのハウプトを 2 年間もして、苦労もしましたが、いい勉強になったと思います。

学 1 でハウプトになったとき、何人かの同級生が入部して手伝ってくれましたので大いに助かりました。その中で、学生の視点でできる研究をしようということになり、東京の矢数道明先生を何人かでお尋ねしたことがあります。昼時にはご近所でおいしい天丼をご馳走になり、中身の詰まった大きなエビフライに感激しました。後世方の大家として有名な矢数先生がその時、「漢方はまず傷寒論・金匱要略の古方をしっかり学ぶことが重要です。あなた方は藤平先生についてまずしっかり古方を学びなさい。」といわれたことを、天丼以上に覚えています。勉強嫌いで古方が今でも十分に身につかない私は、まだ当分の間、古方を臨床の中心にしたいと思っています。飯塚病院漢方診療科で毎朝、始業前に約 30 分間行っている勉強会でも、「傷寒論」と「金匱要略」に「類聚方廣義」の 3 冊を繰り返し読んでいます。今のところ何回読んでも勉強になります。

学生時代に、個人の眼科開業医でありながら全国から来る重症患者を入院させ、一人で漢方診療に当たっておられた小倉先生に接し、随分影響を受けたと思います。小倉重成先生は古方以外の漢方薬は使われませんでしたが、玄米菜食や鍛錬のための運動などを診療に取り入れ、ご自身も実践しておられました。そして、「外来だけではなく入院で診なければ本当の漢方はわからない」としばしば言われていました。漢方診療は健康保険では十分な評価がされず、多くは自費診療で受け継がれ、入院での漢方診療は今でも殆ど行われていません。私は西洋医学が十分に行える総合病院で、病棟を持って漢方診療を実践してみたい。こんな夢を持つようになりました。

卒業後は藤平先生などの教えもあり、漢方を一時封印して西洋医学の研修に集中することに決めました。母校の第 2 内科に入局し、2 年間内科をローテーション後、旭中央病院で救急を含めてさらに 2 年間の内科研修をしました。その後は東医研の先輩である寺澤捷年先生と土佐寛順先生、次いで今田屋章先生などが行って創設された、富山医科薬科大学附属病院和漢診療室に昭和 57 年から参加しました。現在の嶋田豊教授など富山の一期生と共に、念願の病棟を持つ漢方診療を開始したわけです。大学病院の中で初めての本格的な漢方病棟を目指した 10 年間は、様々な経験を積み大変勉強になりました。漢方の臨床研究

で学位を頂戴できたことも幸せでした。平成４年に現在の飯塚病院に移りましたが、一般病院での病棟を持つ漢方診療の場を得られて、子供の頃から育てた夢に少しずつ近づける自分は、本当に幸せな人生を歩んでいると感謝しています。